壬生町役場庁舎閉庁記念

look back to 32 years.

振り返る32年の町の歩み

７代町長
（平成２年４月16日～平成22年４月15日）

清水 英世（しみず ひでよ）

令和４年５月に現在の壬生町役場庁舎が閉庁となります。それにあたり、小菅一弥町長、清水英世前町長にインタビューを行い、平成元年から令和２年の32年間にわたる壬生町発展のカギとなる出来事を振り返りました。

32年を振り返る

８代町長
（平成22年４月16日～）

小菅 一弥（こすげ かずや）

【聞き手】
下野新聞社下野支局長 野村（のむら） 明敏（あきとし）氏

対談の様子

文化芸術が薫る町の実現に向けて

語り手 清水 英世

■就任以来、〝音楽のまちづくり〟にも取り組まれ、多くの国内外の有名アーティストを招へいしました。

もともとクラシック音楽が好きでした。国から派遣され県の土木部長をやっていた人が、異動で宮城県の道路部長になったのですが、その人の紹介で宮城県の中新田町に視察に行きました。そこは町の予算が30億円ぐらいの町なのですが、8億円かけてバッハホールという300人規模のクラッシック音楽専門のホールを作ったんです。そして、東京から一流のアーティストを呼んで音楽のまち、芸術のまちとして〝まちづくり〟をしていました。「これはいいな、これを本町のまちづくりにも、なんとか生かせないか」と考えました。

壬生の中央公民館のホールは、音楽ホールとして作られたわけではなかったのですが、非常に音響効果が良いとNHKなどからも高い評価を受けました。特にひとりで演奏するソリストにとって、1，000席程度の大きさは、ちょうどよいということでした。

東京に近いという地の利もあって、毎年、プラハ交響楽団やベルリン交響楽団など、また、ブーニンやツィマーマン、中村紘子や佐藤しのぶなど世界一流の演奏家やオーケストラを招くことができ、町内、県内だけでなく県外からもチケットを買い、鑑賞に訪れる人が増え、町の活性化にも役立ちました。このようにクラシック音楽による〝まちづくり〟を推進し、生の芸術である本物に、そして、最高水準の芸術に触れ、身も心も揺さぶられる感動と音楽の醍醐味を味わってもらうように努めました。

なぜ、小さな町が一流の演奏家を呼べるのかと聞かれたことがありました。ホールが演奏家に評判良かったことなどもありましたが、音楽プログラムの担当者に恵まれたことが大きかったと思います。日本中、いい音楽を聴きに歩き、東京へも何度も出かけ情報を集めていました。そして、町民に一流の音楽を聴いてもらいたいと相当な努力をしてくれました。こうした人がいなければ、これだけの企画は実現出来なかったと思います。

■音楽のまちづくりで印象に残っていることはありますか。

平成6年にNHKが羽生田小の全校合奏を「95人の大合奏・小さな学校の大きなチャレンジ」として放送しました。1年生から6年生の全校児童が県の中央音楽祭出場を目指し、「アイーダの大行進」の合奏に一生懸命取り組む姿とそれを支える学校、家庭、地域の様子を取り上げました。全国放送されると大反響を呼び、超党派の議員連盟の依頼で参議院別館講堂で演奏することになりました。私たち町関係者も同席しましたが感動と満足感にひたったことが、今でも忘れられない思い出となっています。

読売音響劇団による音楽指導（平成20年９月）

国会議事堂での羽生田小学生による全校大合奏（平成８年２月）

城址公園の様子

壬生中央公民館で購入した「スタインウェイ」

館内展示の様子

おもちゃ博物館フロア案内（広報みぶ平成７年11月号）

町を代表する施設、遊べる博物館

語り手　清水　英世

■町を代表する観光施設になっている『おもちゃ博物館』の建設にはどんな経緯があったのですか

『おもちゃ博物館』建設は、楡井前町長時代の構想を引き継いだものです。竹下内閣の「ふるさと創生1億円事業」を受けて取り組んだ事業でした。トミーやバンダイなどおもちゃメーカーがある町の特性を生かした〝まちづくり〟を推進しようということだったと思います。楡井前町長が下地を作っておいてくださったので、私はどこにどんな風につくれば考えればよかったんです。さらに、日本輸出玩具登録協会の全面的な協力が得られ、約3万点のおもちゃが無償貸与され、建設計画推進に弾みがつきました。

私は県教育委員会時代に、県の子ども総合科学館の建設に関与していました。あの施設が成功したのは、子どもたちが展示物に触れられるようにしたことでした。それで私は建設するに当たって、『おもちゃ』を展示して、見せるだけではなく、子どもたちが玩具を使って遊べて、活動できる施設にするという方針を決めました。

オープン初日には7千人が訪れました。記念式典では「おもちゃ団地を持つ町に、全国でも例を見ない『おもちゃ博物館』が開館するのは大変意義のあること。大人の郷愁と子どもの夢の架け橋としてロマンとメルヘンを与えたい」とあいさつしました。

ただ、開館当時は、まだ道路が整備されていなかったので、おもちゃ博物館が出来たと聞いたけど、いったい行くのにはどうやって行ったらいいのかという問い合わせがたくさんありました。平成12年に北関東自動車道が開通し壬生インターができてからは、この問題は解消しました。インターと直結したので、県外のお客さんもたくさん増えました。

『おもちゃ博物館』は西洋のお城をイメージしたものですが、なんでモーテルのような建物にしたのかと言われたこともありました。建物については、発展性を考慮して増築が容易にできる構造にしました。実際、鉄道模型の部屋などを増やしましたが、これがガラス張りなどの建物ではそうは行かなかったでしょう。県もわんぱく公園内に、『子どもの城』と『不思議の船』という『おもちゃ博物館』のイメージに合わせた施設の整備をしてくれました。

おもちゃ博物館オープン（平成７年４月）

町を一変させた壬生インターチェンジ

語り手　清水　英世

■壬生インターチェンジの開設により、町の交通網が整備され、町発展の起爆剤になりました。

緑化フェアの前には、既に北関東自動車道の建設が進行中で、フェア会場近くにインターチェンジ（以下「IC」と称す）を設置すること決まっていました。しかし、私は、インター開設に向けた整備に苦労いたしました。あそこはICとしては小さいんです。家がたくさんありましたから、小さくせざるを得なかった。

さらに時間的な制約もあり、整備はそう簡単にはいかなかったですね。県道宇都宮・栃木線の4車線化と合わせ、建設用地の確保が大変でした。緑化フェアの開催までに開通しなければならないので、まさに時間との戦いでした。町の職員や県職員の地道な努力があってなんとか開通にこぎつけました。県道の拡幅では、当時町議だった石村壽夫さんが、地元の調整に尽力してくれました。

また、幸いなことに国派遣のの土木部長が本庁に戻って道路局長になっていたので助かりました。こうした人たちが支援してくれたのは、大変ありがたいことでした。

緑化フェア期間中は、全国から北関東自動車道を利用して来町していただいただけでなく、ICは壬生会場と宇都宮会場を結ぶシャトルバスの運行経路としても、利用されました。緑化フェアの成功は、北関東自動車道の開通がなければ実現しなかったと思います。

■壬生ICの開通は町にどんな影響をもたらしましたか。

町の状況が一変しました。町の活性化にとって、1番大きかったと思います。町から東京に行くにも、ほかから町に入って来るのにもすごく便利になりました。今では羽生田産業団地にもスムーズに行けます。『おもちゃ博物館』にとっては、本当に大きな効果をもたらしました。茨城県や群馬県からのお客さんがたくさん増え、「壬生」の名前を県外へ発信することになりました。

獨協医科大学病院がICから近いので、県外から病院に来る人にとっても、壬生ICの存在は大きいと思います。また、救急車の走行は、1分1秒の短縮が患者さんの命を左右することもありますから、ドクターヘリとともに地域医療の生命線とも言える役割を果たしていると思います。音楽が好きな私は、群馬交響楽団や水戸室内管弦楽団の演奏会に車で行くことが夢だったのですが、壬生ICのおかげで実現できました。

整備中の様子（広報みぶ平成11年12月号）

壬生IC北通り

開通した壬生IC

夢と活力にあふれた緑園都市の実現へ

語り手 清水 英世

■平成2（1990）年に町長に就任してから町づくりの柱に「緑園都市」を掲げました。

県の教育委員会にいた頃、文部省（当時）の海外教育事情視察派遣団の一員としてアメリカやフィンランドなど世界7カ国を視察する機会に恵まれました。ニュージーランドのクライストチャーチが特に好きになりました。大きな公園の中に街があるんです。こうした海外の緑豊かな公園や広場を核として形成された都市を見た経験を生かして〝まちづくり〟を推進しようと考えました。

ただ、理念を端的に表す言葉が見つかりませんでした。最初はフランス人建築家の「緑と太陽と空間を生かしたまちづくり」と言っていました。その後、新たな町振興計画を策定した際に、機転の利く職員が「夢と活力にあふれた緑園都市」という文言を考えてくれました。

幸い、佐藤三郎元町長の尽力で獨協医科大の誘致に成功し、学園都市という基礎ができていました。学園都市に緑園都市を上乗せするというコンセプトで、町中央部に計画されていた壬生総合運動公園の完成に全力を挙げることにしました。

北ゲート前でテープカット（平成12年9月）

■この緑園都市構想が結実し、「公園のまち壬生」のイメージを定着させたのが平成12年の「第17回全国都市緑化フェア」ですね。

楡井前町長が企画した運動公園を継続して、積極的に推進を図っている時に栃木県が緑化フェアの開催を引き受けることになったんです。それまでの緑化フェアの会場は県庁の所在地ばかりでした。新潟県は新潟市、石川県は金沢市です。小さな町がメイン会場になったことなど一度もありませんから、決定したときは本当に驚きました。

当時の渡辺文雄知事の所にお礼に行くと、「お礼を言うなら私ではなく、地元の県議の佐藤勉さんですよ」と言われてまたびっくりしました。県がどこにしようか迷っていた時に、佐藤さんが積極的に動いて議会や県にアピールをして壬生開催の方向に持って行ってくれたようです。

タイミングにも恵まれました。観光の核となる『おもちゃ博物館』があり、北関東自動車道壬生インターの開設、県道宇都宮・栃木線の4車線化も進行中でした。全国都市緑化フェアは、国や県、日本道路公団などの支援と、町職員の奮闘努力、地域の方々の協力があって開催できました。このイベントがなければ「緑園都市・壬生」は確立できませんでした。

秋篠宮殿下・妃殿下ご視察の様子（平成12年9月）

おもちゃ博物館リニューアル

語り手　小菅　一弥

■町を代表する観光施設おもちゃ博物館の入館者の減少に歯止めを掛けるため、リニューアルを行いました。

できたばかりは、珍しさもあって年間の入館者は20万人近くになり、好調でした。しかし、年数の経過とともに段々と減っていきました。無料開放された全国都市緑化フェアの年を除けば、10～13万人で推移してきました。公共が作った施設は年間5万人入れば御の字、10万人以上なら大したものだという時代でもあったと思います。しかし、私が町長に就任しても低落傾向が続いていたので、リニューアルをかけてV字回復を図ろうと考えました。リニューアルを決めて、改めて館内を見てみると、1階は暗く2階は展示物だけで、今の子どもたちにとってはつまらないだろうなと正直感じましたね。

正面から見たおもちゃ博物館

■リニューアルはどんな方針で臨んだのですか。

リニューアル構想はプロポーザルを掛けて募集しました。5、6社が応募し、その中の1社に絞りました。コンセプトは今でいう「キッズランド」の走りだったと思います。博物館には色々決まりがあります。それを大事にするのか、脱するのか迫られました。少しお叱りを受けた部分もあるのですが、「誰も来てくれない博物館ではしょうがない。来てもらって見てもらってこそ価値がある」と思い切ったリニューアルをすることにしました。来てもらえなければ、日本一のおもちゃのコレクションも宝の持ち腐れですから。

リニューアルオープン式（平成24年3月）

整備した高さ7メートルある大型遊具「きんぐとくぃーん」は、子どもたちが体を使って思いっきり遊べます。館内の壁紙の色もカラフルにイメージチェンジしました。リニューアル後は2014年度に、開館以来、初めて入館者が20万人を突破しました。

2016年度から、玩具大手タカラトミー出身の久米井靖裕さんを館長に招き、運営も一般公募による委託運営に切り替えました。久米井さんは、民間の感覚でイベントの企画や情報発信などさまざまな改革をしてくれました。来館者に対するスタッフの接し方も変わりました。こうしたスタッフの努力で2016、17年度は2年連続で入館者25万人を突破しました。飽きられないために、ソフト、ハード両面で絶えずリニューアルを心掛けなければなりません。コロナ禍への対応も知恵を絞って取り組んでもらいたいですね。

3階　そらのひろば

1階　きんぐとくぃーん

世界へ…、ファナックの操業開始

語り手 小菅 一弥

■ファナックが進出した県の「みぶ羽生田産業団地」は、元々は県の新競馬場予定地でした。

県が県営競馬場の移転予定地として、平成11(1999)年ごろまでに約80㌶を買収しました。その後、社会情勢の変化で競馬場事業収益が悪化し、2002年に計画が中止になり、予定地の利用法が宙に浮いてしまいました。農政関係のイベント「とちぎファームフェスタ」が開催はされましたが、維持にお金をかけているだけでは、しょうがないという声が上がり、県に産業団地に用途を変更するよう働き掛けようという機運が盛り上がってきました。

ただ、競馬場用地ということで買収に応じた町民の皆さんに変更を納得してもらうことが必要になります。私が町議会議長を務めていた平成18(2006)年に、地元の議員さんをはじめ多くの議員からも賛同を得て、産業団地への用途変更を求める「旧競馬場移転予定地の羽生田県有地の有効な土地利用を求める意見書」を採択しました。

これを受けて、清水英世町長と一緒に福田富一知事に、用途変更をお願いに行きました。

■みぶ羽生田産業団地の分譲は、平成24(2012)年に始まり、ファナックの進出が決まったのは平成26(2014)年でした。

分譲を開始してすぐに、自動車部品と食品関係の事業所が決まり、幸先いいなと思いました。しかし、その後は動きが止まり、町長に就任していた私は、企業誘致を担当する県の東京事務所に月に1回は顔を出して情報の収集にあたりました。ある時、企業誘致の本部長がにこにこしながら「まだ言えないけれどいい話がある」と耳打ちしてくれました。その時は教えてもらえませんでしたが、ファナックの壬生町進出のことだったんだと思います。

業績好調だったファナックは、用地をそっくり買ってしまう意向を持っていました。福田知事が直接、ファナック側と面会し誘致が決まりました。交渉を進める内に知事の人柄に惚れ込み、信頼できると感じたようです。獨協医大の当時学長の稲葉憲之氏は、ファナックの社長と縁戚関係にあり、壬生ふるさと夢大使を務めていたこともあり、壬生の素晴らしさを伝えてくれ、壬生進出への後押しをしてくれたんだと思います。

本社のある山梨県での大雪被害により、リスクを減らして事業を継続出来る事業用地を探していたということもあり、地盤が強く自然災害が少ない壬生町の特徴が、誘致の大きな理由だった思います。ファナックの操業開始により、町の雇用や税収に大きく貢献をいただいております。今後、コロナ後の世界経済の立ち直りと共に、ファナックのロボットが世界中で引っ張りだこになり、ますます発展すると思っています。町民の皆さんはその時に、本当にいい企業に来ていただいたという実感が改めてわくのではないでしょうか。

ファナック竣工式の様子（平成28年6月）

ファナック壬生工場

旧壬生藩の伝統を生かした論語教育

語り手　小菅　一弥

■旧壬生藩の藩校「学習館」の伝統を生かした論語のまちづくりが進んでいます。

素読を中心にした論語教育は、亡くなられた前教育長の落合範子さんが推進してくれました。江戸時代、学習館では熱心な論語教育が行われていたことが歴史資料で明らかになり、落合前教育長から「町で論語を学ぶことは必然性がある。論語教育を大切にしたい」と話がありました。それは非常に素晴らしいから、まずは、盛り上げるために素読に取り組み、大きな会場で大人数の朗誦ができたらいいねという話になりました。それから、「壬生・論語古義抄」の作成や大人向けの講座などさまざまな取り組みに発展していきました。

あるとき、小学生の子ども持つ保護者が、「町長、うちの娘が校長先生にほめられたといって目を輝かせている」という話をされました。論語の審査があって校長室で審査を受けたときに「合格。よく覚えられたね」と審査員の校長先生にほめられたことをすごく喜んでいたというのです。この話を聞いたとき、この教育はすばらしいなと感じました。落合前教育長と各学校の校長先生がチームを組んで取り組んでくれたおかげです。落合前教育長の遺志は、田村幸一教育長にしっかりバトンが渡され、論語教育のなかで、ほかの市町にはない味のある子どもたちが育っていると感じています。論語検定の費用は壬生町ロータリークラブが支援してくれています。壬生藩鳥居のお殿様から続く、「町の発展は教育があってこそ」という気風が残っているのだと思います。

町民1,000人の論語大朗誦（令和元年11月）

■こうした論語教育の取り組みが、令和3年11月に開催された藩校サミットの誘致につながっています。

「壬生論語検定」は、東京湯島聖堂を運営する漢字文化振興協会の認定を受けています。藩校サミットは同協会が毎年、藩校のあった自治体と共催しているイベントです。藩校の教育と文化の継承を目的に開かれていますが、町が会場になるのは、全国で初めてです。毎年、論語検定を多くの町民が受験し、合格者を出していることをはじめ、町を挙げての論語教育が評価されたのだと思います。昨年11月、同サミットのプレイベントとしてギネス記録に挑戦した「町民１０００人の論語大朗誦」では、７４８人が暗唱できたと認定され記録を樹立しました。会場では、落合前教育長の遺影が記録達成を見守り、田村教育長が拍子木で達成を支えてくれました。壬生には足利学校のような論語にまつわる器がないだけに、町民と職員が知恵と心を繋いで論語教育を育てたと感じています。

全国藩校サミット壬生大会「みぶっ子論語大朗誦」（令和３年11月）

©ウメマツカヲル

災害に強い拠点「新庁舎」建設へ

語り手 小菅 一弥

建設中の新庁舎（令和３年６月）

■壬生甲の町総合運動場の旧CDグラウンドで、令和４（２０２２）年５月開庁を目指して新庁舎の建設が順調に進んでいます。

平成23（２０１１）年３月の「東日本大震災」のときに、役場庁舎が大きく揺れましたが、損傷もほとんどなく、一安心しました。

しかし、平成28（２０１６）年、今度は熊本地震が起きました。宇土市の市役所庁舎や益城町の役場庁舎が潰れた様子をニュースで見て、災害の時に対策本部となるべき庁舎が使えなくては住民を守れないと思いました。町議会もあの地震を受けて、自然と庁舎の整備に取り組もうという雰囲気になりました。

お隣の下野市は合併特例債をうまく使って新庁舎を建設しましたが、壬生は単独の町として進むという基本理念がありますので、この地震を契機に創設された国の建替え支援策「市町村役場機能緊急保全事業債」を活用して、この機会を利用して体育館よりも先に新庁舎を整備しようと決断し、２０１７年の６月町議会で建て替えを表明しました。

国に壬生の場合は適用されるか、確認を取りました。町には全体で約50億円の基金がありましたが、新庁舎建設に全部使うわけにはいきません。できるだけ有利な形で予算を確保しなければなりません。

■新庁舎の建設場所はどんな経緯で決まったのですか。

現庁舎は敷地が狭く、接道も狭小です。こうした現状を踏まえ、建設場所は庁舎建設委員会に複数の候補地から検討してもらいました。町議会にも庁舎建設特別委員会を作っていただいて、よくもんでもらって決定しました。

新庁舎は、町の地理的にも、人口的にも中心となる場所で、交通の利便性の高いところが良いと考えていましたが、この場所は、まさにぴったりの場所だと思いました。

また、災害の際は住民の避難場所や復旧隊の集合場所としても使えるように広場を広く取っています。若い職員が10年後、20年後に「いい庁舎を作ってくれた」と思ってもらえるような庁舎にしたいという思いがありました。

令和４年のゴールデンウイーク後の開庁を予定しています。式典には町を支えてくださっている81の自治会の会長や民生・児童委員の皆さんにも出席していただきたいと考えています。演出はこれから考えていきます。

また、現庁舎の跡地が生じることについては、旧壬生地区にとって大きなチャンスだと考えています。地域住民や街おこしの専門家などからの意見を活かしながら「賑わいの中心」となる場所へと整備を進めていきます。

建設現場見学の様子（令和２年12月）

捨てコンクリート工事（令和２年10月）

壬生町32年間の歩み

平成	
1990（平成2）年	クリーンセンター落成
1994（平成6）年	生涯学習館オープン 富士山古墳（羽生田）から国内最大級の家形はにわが出土
1995（平成7）年	行政運営が評価され、全国町村会から優良町として表彰 壬生町おもちゃ博物館開設、町総合運動公園オープン
1996（平成8）年	第10回国民文化祭・とちぎ95「国際おもちゃフェスティバル」開催 環境センター落成、わんぱく北っ子の森完成
1998（平成10）年	中学生海外派遣事業を開始
2000（平成12）年	ふれあい交流館オープン 北関東自動車道開通
2003（平成15）年	第17回全国緑化都市フェア開催 むつみの森・ドリームキッズオープン
2004（平成16）年	東雲公園完成
2005（平成17）年	「とちぎファームフェスタ2005」が羽生田で開催
2007（平成19）年	「女性看護人（看護婦）」国内初は壬生と確認される
2009（平成21）年	みらい館オープン みぶハイウェイパークオープン
2010（平成22）年	栃木県ドクターヘリが獨協医科大学病院を基地病院として運航開始
2011（平成23）年	町道3・550号線（役場庁舎前道路）開通
2012（平成24）年	県道安塚停車場線開通 みぶ羽生田産業団地分譲開始
2013（平成25）年	壬生町おもちゃ博物館リニューアルオープン デマンドタクシーみぶまる運行開始
2015（平成27）年	町道2・565号線（インター北通り）開通 石橋地区消防組合壬生消防署移転・運用開始
2020（令和2）年	壬生町特別広報官に「壬生むつみ」任命 ファナック株式会社壬生工場一部操業開始
2021（令和3）年	「同時に孔子の言葉を暗唱した最多人数」としてギネス記録を樹立
2022（令和4）年	全国藩校サミット壬生大会開催 壬生町旧庁舎閉庁

2005

とちぎファームフェスタ2005

1995

国際おもちゃフェスティバル

1994

家形はにわ

2009

みぶハイウェイパーク

2010

ドクターヘリ

2021

第18回全国藩校サミット壬生大会

2013

デマンドタクシーみぶまる

2022

新庁舎

Where is Mibu town heading to?

壬生町はこれからどこへ向かうのか？

壬生町の未来を考える

壬生町32年間の歩み

1990（平成2）年	クリーンセンター落成
1994（平成6）年	生涯学習館オープン
	富士山古墳（羽生田）から国内最大級の家形はにわが出土
1995（平成7）年	行政運営が評価され、全国町村会から優良町として表彰
	壬生町おもちゃ博物館開設、町総合運動公園オープン
1996（平成8）年	第10回国民文化祭・とちぎ95「国際おもちゃフェスティバル」開催
1998（平成10）年	環境センター落成、わんぱく北っ子の森完成
2000（平成12）年	中学生海外派遣事業を開始
	ふれあい交流館オープン
	北関東自動車道開通
2003（平成15）年	第17回全国都市緑化フェア開催
2004（平成16）年	むつみの森・ドリームキッズオープン
2005（平成17）年	東雲公園完成
	「とちぎファームフェスタ2005」が羽生田で開催
2007（平成19）年	「女性看護人（看護婦）」国内初は壬生と確認される
2009（平成21）年	みらい館オープン
	みぶハイウェイパークオープン
2010（平成22）年	栃木県ドクターヘリが獨協医科大学病院を基地病院として運航開始
	町道3・550号線（役場庁舎前道路）開通
2011（平成23）年	県道安塚停車場線開通
2012（平成24）年	みぶ羽生田産業団地分譲開始
	壬生町おもちゃ博物館リニューアルオープン
2013（平成25）年	デマンドタクシーみぶまる運行開始
	町道2・565号線（インター北通り）開通
2015（平成27）年	石橋地区消防組合壬生消防署移転・運用開始
	壬生町特別広報官に「壬生むつみ」任命
2020（令和2）年	ファナック株式会社壬生工場一部操業開始
2021（令和3）年	「同時に孔子の言葉を暗唱した最多人数」としてギネス記録を樹立
	第18回全国藩校サミット壬生大会開催
2022（令和4）年	壬生町旧庁舎閉庁

とちぎファームフェスタ2005

2005

1995

国際おもちゃフェスティバル

家形はにわ

1994

みぶハイウェイパーク

2009

2010

ドクターヘリ

第18回全国藩校サミット壬生大会

2021

2013

デマンドタクシーみぶまる

2022

新庁舎

Where is Mibu town heading to?

壬生町はこれからどこへ向かうのか？

壬生町の未来を考える

壬生町役場庁舎閉庁記念

振り返る32年の町の歩み

発　　行／壬生町
〒321-0292 栃木県下都賀郡壬生町通町12番22号
（新庁舎 〒321-0214 栃木県下都賀郡壬生町大字壬生甲3841番地1）
企　　画／壬生町役場総合政策課